
N o c r o s s N o c r o w n

睦月 藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

N o c r o s s N o c r o w n

【Nコード】

N 2 5 4 5 B A

【作者名】

睦月 藍

【あらすじ】

ごくごく普通の女子高生・ツバサの兄が、突如謎の失踪を遂げる。混乱するツバサの前に、ある男が現れる。

「ー君のお兄さんは、この世界にはいないよ」

「彼は、ここではない世界、“ファンタジア”へ行ったんだ」

ツバサは兄を連れ戻すため、その異世界へと向かった。

序章

序章

その日の朝は、鳥のさえずりがやけにうるさかった。
そして、暑かった。
熱気のもったベットに潜り込んだまま、相沢ツバサは顔に滲む汗をぬぐう。

「……、あつい」

枕元に置いてある目覚まし時計を、首をひねって見遣る。
デジタルの時計は、午前六時、と映していた。アラームが鳴るまで、あと三十分は惰眠をむさぼることができる。しかし、

「……起きよう……」

睡眠よりも、ツバサは汗をシャワーで流すことを選んだ。上半身を起こして、薄いブラケットをどかすと、ほんの少しだけ涼しくなった。

二階から降りると、すでに兄が起きていた。

ツバサは、ああ、今日は兄ちゃんの番か、と小さくつぶやいてリビングに足を踏み入れ、そこから見える台所に立つ兄の姿に声をかけた。

長身の瘦身に着た白いワイシャツに、短い茶髪、――兄に間違いなかった。

「今日の朝ごはんはんと弁当作りは、兄ちゃんの番だったんだね」

ツバサの声に、兄はのんびりと振り返る。それから「んー」と短く返して、また下を向いて料理作りに熱中し始める。

ツバサは苦笑を浮かべて、小さく息を吐いた。兄は、あまり喋りたがらない人なのだ。

「ね、わたしシャワー浴びてくるから」

伝える必要は、とくにないような気がしたが、一応言っておく。

兄から返ってきた声は、やはり「んー」だった。

ツバサの両親は、ツバサが小学生のときに他界した

当時六歳だったツバサは、五つ年上の兄、雪せつと四つ年下の紅葉くわはとともに母方の祖父母の家に引き取られた。

祖父母とはよく顔を合わせていたし、変に緊張することはなかったしーただ、これから世話になってしまうという罪悪はあったが、ー幼い紅葉が毎晩両親を思い出して泣くことが幾度かあったが、それ以外に問題はとくになく、慣れない家で毎日寝起きするという非日常に感じていた生活は、いつの間にか日常になっていた。

おそらく自立するまで離れることはないだろう、と思っていた祖母の家を離れたのは、ツバサが中学二年生の、晩春のときだった。高校を卒業し、即就職した兄がツバサと紅葉を引き取りたいと祖母に申し出たのだ。

まだ職に就いたばかりだし、ツバサは来年には受験を控えている、安定した環境に置いてやるべきだ、という祖父の言葉に頷きながらも、兄は「お願いします」と床に額を打ち付けるようにして土下座し、叫んでいた。ゴツツ、と鈍く響いた音が、やけに耳に残った。

それほど必死な兄は見たことがなく、ツバサはどうしてか怖くな

お願いします、ゴツツ、お願いします、ゴツツ、兄の声と硬い頭蓋が叩きつけられる音が思考を揺らし、ツバサの意識を暗くした。そして、気づいたときには、祖父母が兄に駆け寄り「もうわかった、もういい」と泣きそうな顔で兄の肩を撫でていた。

兄は、割れた額から流れる血で濡れた顔に、安堵したかのような微かな笑みを浮かべて何事かを言っていた。たぶん、「ありがとうごさいます」と言ったのだろうが、ツバサはよく聞いていなかった。いつだって物事に対して無気力に構えていた兄が必死になっている姿に、どうしてか狂気じみたものを感じたからー。

「ーツバサ」

ツバサがシャワーを浴びて髪を乾かした頃に起きてきた紅葉をまじえて、ダイニングで兄弟揃って朝食を食べていると、向かいの席に座っている兄に声をかけられた。

「ん？」と、箸をくわえたまま首を傾げると、「箸をくわえたまま喋らない」と怒られてしまった。

ツバサは「ああごめん」と箸を口から離し、「なあに？」と尋ねた。

「どれが一番うまい？」

兄は視線をテーブルに並ぶ皿へとうつつむかせて尋ねてきた。ツバサは料理の感想を尋ねられているのだと気づき、うーんと唸る。

今日の兄の作った朝食は、とくに珍しいものでもない。白米にシジミの味噌汁、おかずにゴボウとニンジンの煮物。

「……、味噌汁かな」

兄が、実はおいしいと言ってほしがっているのが、ただひとつのおかずである煮物だと察しながら、ツバサはそんな答えを返した。

「……………」、「そうか」不満そうに眉間に皺を作って、彼はちまちまと白米を食す兄を見て、思わず笑ってしまった。

「はいはいごめんね、味噌汁もおいしいけど、一番はこの煮物だよ」
おもしろそうに笑みながらツバサが箸の先で指すものが大皿に盛られた煮物であるのを見て、兄は「だろ」と自信のある微笑を見せた。

すると、先ほどまで眠気を引きずってぼやぼやとしていた紅葉が長くウエーブのかかった茶髪を揺らして、「あたしもこれ好き！」と声を上げた。

兄は、ツバサと紅葉と同じ焦げ茶色の目を細めてうれしそうに笑った。

いつもと変わらない笑みを浮かべる兄は、いつもどおりの兄、ツバサが昔から知っている兄だ。

だからツバサは、まったく予想できなかった。

――兄の突然の失踪を……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2545ba/>

N o c r o s s N o c r o w n

2012年1月6日15時52分発行